

「安珍殿……お参りかな？」

「これは！……知事殿」

安珍は、頭を下げる……この大寺院である道成寺では、住持の事を知事と呼んでいた。

「真砂の郷の者達が、会いに来たらしいの？ずいぶん、物騒な雰囲気じゃった……と聞いたが……何があったかな？」

安珍は、いったん……視線を、また……千手観音に向けた……そして、もう一度、知事の方に戻した。

「真砂の者達が怒るのは無理ないのです。」

安珍は、語り始めた……自分の思いを、誰かに聞いてもらいたくなっている……。

蒼い水の中をくぐる清姫のなんと美しかったことか……それは、この世のものとは思えない……まるで、水の精霊のようだった。

そして、障害者や病者の世話をする清姫のなんと優しくしたことだろう……自分は、その姫を、どんなに眩しく感じていたことだろう……

あの事件のあった一夜の事も、安珍は、つつみ隠さず話した……。

「わたしは、あの娘を傷付け……そして、殺してしまったのです……ぜったいに、ゆるされない過ちをしてしまったのです。」

「……………じゃが……娘の方から、忍んできたのであろう？安珍殿は、破戒を恐れただけで……悪いわけではない。……水の霊は……へびだと聞く……。そうであれば、その娘は、蛇淫の性を持っていたのではないかの？」

安珍はムツとした……。

「姫を侮辱するのは……！」

言いかけてやめた……。知事はポカンとしている……。

知事が、安珍への同情心で言っているのだと、わかっている……清姫に会った事のない……知事殿には……わからんのだ。

安珍は、しゃべってしまった事を後悔した……。

「明日、もう一度、真砂の者達が、やってくる事になっています……今度は、私は、殺されてしまうかもしれません……どうか、知事殿のお力で匿っていただけませんか？」

「匿う……？」

「昼間……鐘樓の改修工事で……鐘を地べたに降ろしてあるのを見ました……。あの中に隠れていれば連中も気付かないのではないか？……と思うのです。」

「なるほど……鐘の中なら、刀や槍もきかぬだろうしの……。」